隠岐世界ジオパークの特徴の一つに、『独自の生態系』が挙げられます。植物の分野では生育地や起源の多様性などが大きな特徴です。例えば、以前このコーナーで紹介した金光寺山にある「オニヒョウタンボク」はユーラシア大陸生まれで起源に特殊性がありますし、「エゾイタヤ」は北方系で、生育地に特殊性があります。しかし残念なことに、植物に比べて動物の分野においては分からないことが多々あります。本格的な調査はまだ緒についたばかりなのです。今回はそれに関する調査での新発見についてお話しします。

ホオジロという小鳥の名前は誰もがなじみ深いと思います。昔は観賞のための飼育もされていたようです。その仲間に、「ミヤマホオジロ」(*Emberiza elegans*)がいます。漢字で「深山頬白」と書きます。外観の印象はホオジロととてもよく似ており、大きさも全長約15ｃｍでほぼ同じサイズです。しかし頭部が大きく異なります。ホオジロのオスが白黒茶色の色彩なのに対して、ミヤマホオジロのオスは黄色と黒色が目立つ美しい色彩です(上写真)。学名に *elegans*(エレガンス)という称号が与えられたほどの気品と美しさです。色彩だけではありません。頭部の羽毛を逆立てているスタイルも *elegans* の由来になっているのではないでしょうか。

(↑)こちらはミヤマホオジロの幼鳥。
まだ頭部の毛は逆立っていません

ホオジロが「留鳥(りゅうちょう)」という1年中同じ地域に生息しているタイプであるのに対して、ミヤマホオジロは一般的に「冬鳥」といわれる渡り鳥で、11月頃に越冬のため日本にやってきて、4月～5月頃にまた繁殖地へ移動するというパターンを毎年繰り返します。ですから海士町でも冬期にはお目にかかることができます。繁殖地は、ウスリー川、中国東北部、中部そして朝鮮半島だといわれています。ということは、基本的に日本で繁殖はしないということです。が、例外もあります。20年以上前になりますが対馬(長崎県)と臥竜山(広島県)でそれぞれ一度繁殖した記録があるのです。そして、今年の8月にここ海士町でも繁殖確認ができました。国内3例目、しかも22年ぶりの発見です。調査方法は、前号でお話ししたバンディングという方法で、繁殖の証明となる幼鳥を捕獲するのです。まず、8月8日に巣立ったばかりの幼鳥2羽を捕獲し、9月16日にはさらに少し成長した別個体の幼鳥1羽も捕獲しました。

今回のような調査を積み上げることで新知見を出すなど、隠岐の自然が世間に注目されることが隠岐のジオパークとしての価値を高めることになると思います。

世界に誇る島であり続けるためには、まず自然を知ることが第一条件であり、それを知った人がさらに回りの人々に伝えて、より多くの住民が意識することが欠かせないと思っています。

〔海士町文化財保護審議委員　深谷　治(はじめ)〕